

設計の理念と考え

■来館者を巻き込み文化をつくる拠点

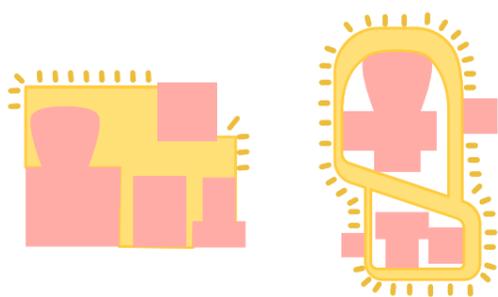
文化芸術は単に観客として眺めるだけでなく、一緒に作り上げる当事者として積極的に参加できる・参加したくなる場づくりが重要であると私たちは考えます。舞台の裏方の様子が垣間見えたり、オーケストラの練習風景が覗けたりすることは、単に鑑賞するだけの演劇・音楽としてでなく、様々な人々の力で文化芸術が今まさに生まれる瞬間に立ち会うような、新鮮な驚きや発見にあふれた体験です。新たなホールはこうした理念のもと、表動線と裏動線は安全かつ機能的に分離できる計画とした上で、使い方に応じて観客と演者・裏方がシームレスにつながるようなホールとします。

■活きた活動としての震災メモリアル

震災からの復興過程において、仙台フィルの復興コンサートをはじめとした文化芸術活動は人々の大きな支えとなりました。震災メモリアル拠点についても、単なる記録・アーカイブとしてだけでなく、こうした活きた文化・活動とともに次世代へ継承し新たな世代を巻き込むことが不可欠だと考えています。

■回遊性を高め人・イベントとの接点を増やす

Sの字形に細長く伸びた回廊状のロビーがめぐる形式は、中央にまとまったメインロビーがある形式と異なり、様々な場所・活動への接点が多い計画です。目的の場所へ向かう途中で、ふらりと散策するように訪れた先で、常に偶発的な出会いや発見に満ちた空間です。さらに人の流れ・活動の場が建物外周部に展開することで、外からも内部のにぎわいが感じられ、裏をつくらないホールとなります。



■見る／見られるの関係を随所に生む

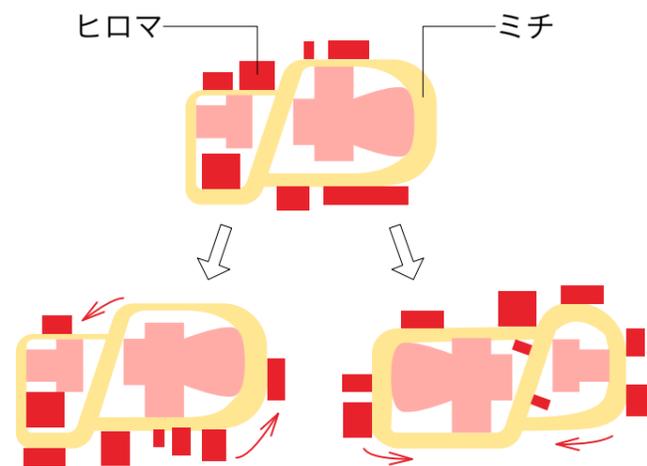
ミチに沿って並ぶ練習室やリハーサル室はプロだけでなく市民も利用可能なスペースです。観客として見るだけでなく、ここに立てば市民一人ひとりの小さな舞台としてミチや外部から見られる場になります。こうした見る／見られるの関係を随所に展開していくことで、傍観者ではなく当事者として文化を一緒に作りあげていくことにつながるのだと考えます。

設計を進める上で特に留意すること

■対話を通じた設計プロセス

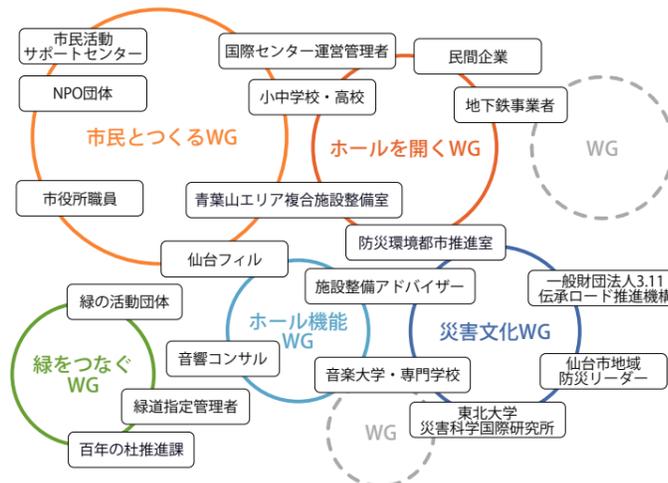
本計画はホールに震災メモリアル拠点が複合した施設であり、青葉山エリア複合施設整備室、防災環境都市推進室、仙台フィル、指定管理者をはじめ様々な立場の関係者との合意形成が不可欠です。

ミチとヒロマという単純明快な構成は、案の骨格を踏襲しながら対話を通じて自由に部屋の配置や組み合わせを変更することが可能です。こうした要望、使い勝手などに応じて、柔軟に設計を進化させていくプロセスは、建物への愛着を育むことにもつながります。



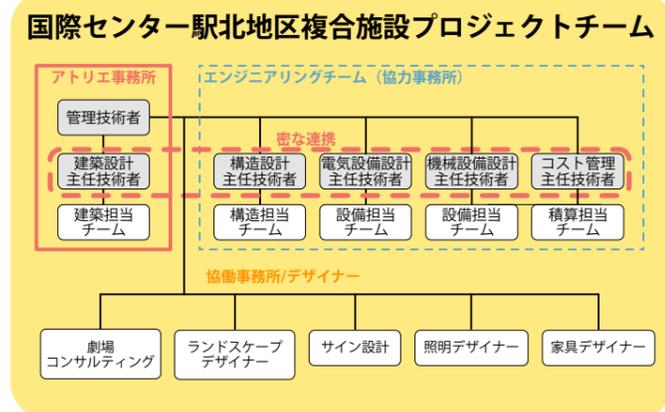
■テーマを絞った議論の場をつくる

関係者が大勢いる今回のような大規模プロジェクトにおいては、参加者や目的を絞った会議体をデザインすることが重要であると考えます。ホールの管理運営体制と仙台フィルの日々の活動、そして市民の活動との連携や協働の方法、中心部震災メモリアル拠点としての活動のあり方、敷地周辺の歩道・緑道との接続、地下鉄駅との連絡、国際センターとの連携など、複雑に絡み合うネットワークを紐解き、トピックに合わせてワーキンググループ(WG)を立ち上げることを提案します。こうしたWGは実施設計・工事段階においても、必要に応じて継続して開催します。



■各分野のスペシャリストを結集したプロジェクトチーム

本チームは各分野の専門家がそれぞれの長所を最大限発揮しながら、管理技術者・建築設計主任技術者をハブとして緊密な連携と迅速な意思決定を行います。



○統括・建築設計

これまで仙台市内をはじめ、全国で様々な大規模公共建築を設計監理した実績もあり、大学から庁舎、交流施設まで様々な用途・規模の設計を手がけています。また、東日本大震災や熊本地震、能登半島地震の復興プロジェクトに現在も継続的に取り組んでおり、建築の設計のみならず、未来のツーリズムに向けたイベントを定期的で開催しています。これらの経験を本プロジェクトにも最大限発揮します。

○構造設計

ホールはもちろんのこと、住宅から超高層まで多種多様な用途・規模・構造形式を手掛けてきた経験豊富な設計者です。安全かつ合理的・経済的な構造形式を提案します。

○電気・機械設計

これまで全国で多数のホールの設計実績があり、豊富な経験と最新のセンシング技術を組み合わせることで最適な環境を実現します。

○劇場コンサルティング

国内外で様々な規模のホールの調査から設計コンサルティング、企画運営に至るまで、劇場・ホールに関するあらゆる業務に携わってきた豊富な実績を有しています。劇場・ホールのスペシャリストとして、現代にふさわしいホールのあり方を提案します。

○その他デザイナーとの協働

ランドスケープやサイン計画、照明や家具デザイナーなど各分野のスペシャリストを結集します。設計の進捗に合わせて早い段階から協働することで、仙台ならではの創造的で新たな魅力や価値を生み出す新しい施設となります。

コスト縮減に関する提案

将来の大規模改修を想定した設計上の配慮

■計画初期段階からのコスト検討・規模精査

基本設計は中間報告を区切りとして2つのフェーズにわけ、前半フェーズにて大概算を算出します。設計が進むにつれて大幅な減額項目の選択肢は限られていくため、基本設計の初期段階において近年の物価上昇・労務費上昇の傾向を踏まえて、適切な面積・規模・構造の目標ラインを設定します。

■過度な仕上げを廃し素材の風合いを活かす

ホールの性能、楽都仙台のシンボルとしての空間の質は担保したまま、仕上げ材の選定にはメリハリをつけた計画とします。過度な仕上げを極力少なくし、不要な部分は躯体現しや天井レスの計画とすることで特定天井等の制約や天井落下の防止にもつながるとともに、イニシャル・ランニングコストの縮減を行います。また、なるべく素材そのものの風合いを活かした材料・仕上げを採用することで、経年変化自体も建物の価値を高め愛着を深めるような内外装のデザインを行います。

■重ね使いを積極的に可能にするプラン

ミチとヒロマによる構成は、表動線と裏動線を適宜切り替えることができ、練習室と楽屋を併用するなど空間の重ね使いを積極的に行うことで必要諸室を抑えて面積の縮減を行います。整備規模を小さくすることはイニシャルコストはもちろん、将来的な維持・メンテナンス費低減にもつながります。

■冗長性のある動線計画

大規模建築物であるため、改修においてもかなりの日数を要します。ループ状の動線はホワイエにもそれぞれの部屋にも複数の経路でアクセスできるため、大規模改修時には片方を利用者動線とし、片方を改修工事スペースに充てるなど、利用しながらの改修工事にも効果を発揮します。

■更新性に配慮した設備計画

設備機器の更新は建築の耐用年数のサイクルよりも早く訪れます。また、めまぐるしいスピードで更新されていく最新技術の取り入れを見据え、常に時代の流れに添った最新設備を備えられるよう、イニシャルコストを見据えながら十分に余裕をもった設備スペースを確保し、更新性に最大限配慮した計画とします。

■面積表

5F	1453㎡
4F	4462㎡
3F	5161㎡
2F	6679㎡
1F	9495㎡
BT1F	4474㎡
total	31724㎡

整理番号